

古墳時代前期における小型鏡の系譜と変遷 —重圏文鏡・珠文鏡を対象として—

中井 歩

1. はじめに

銅鏡は古墳時代の社会を考えるうえで重要な考古資料の一つであり、さまざまな視点から研究が進められてきた。古墳時代の銅鏡の特徴として、大きなものから小さなものまで、面径にバリエーションがあることが指摘されている。特に、日本列島で作られた倭製鏡は10cm以下のものから40cm以上のものまで、その差が非常に顕著である。この面径差について、かつて小型鏡は大型鏡の簡略化の結果であるとして、新しい時期に位置づけられてきた(小林行1965など)。しかし、倭製鏡の研究が進む中で、捩文鏡系などの小型の鏡も内行花文鏡系・方格規矩四神鏡系・鼉龍鏡系といった大型鏡と同時期に出現していたことが明らかとなってきた。さらに、面径序列は倭製鏡の生産・流通を管理していた近畿中央政権による格差づけを配布戦略としたものであり、それが前期倭製鏡創出の意義であるということが指摘されている(森下1991;車崎1993;下垣2003b;辻田2007など)。

このような研究の進展のなかで、小型鏡への注目も高まってきた。特に、珠文鏡や重圏文鏡といった面径10cm以下の最も小さな鏡群は、大型の倭製鏡よりも出現時期が早いことが指摘されており、弥生時代から古墳時代への列島における銅鏡生産の変遷を考えるうえでも課題となる資料である(森下2007,2010)。近年、資料の増加や倭製鏡研究の進展に伴い、これらの鏡群に関しても分類や編年の再検討が進んでいる(岩本2012,2014;脇山2013a,2015)。しかし、これらの鏡群は墳墓以外から出土するなど他の前期倭製鏡とは異なる様相を見せることもあり、生産体制や系譜に関する評価が分かれている。

筆者は以前、古墳時代前期の珠文鏡について若干の検討を行ったことがある(中井2017)。そのなかで古墳時代前期の珠文鏡を大きく2つに分け、両者が特に鈕孔形態や製作時期で異なる様相を示すことを指摘した。今回の分析では重複する部分も多いが、改めて古墳時代前期の小型鏡として重圏文鏡と合わせた検討を行いたい。そこで、本論では重圏文鏡と珠文鏡について、分類・製作技術・時期の検討を行い、これらの鏡群の系譜や変遷、生産体制について議論を行う。そして、これらの鏡群が出現した弥生時代終末期から古墳時代前期における銅鏡生産の変遷について小型鏡の観点から考察することを目的とする。

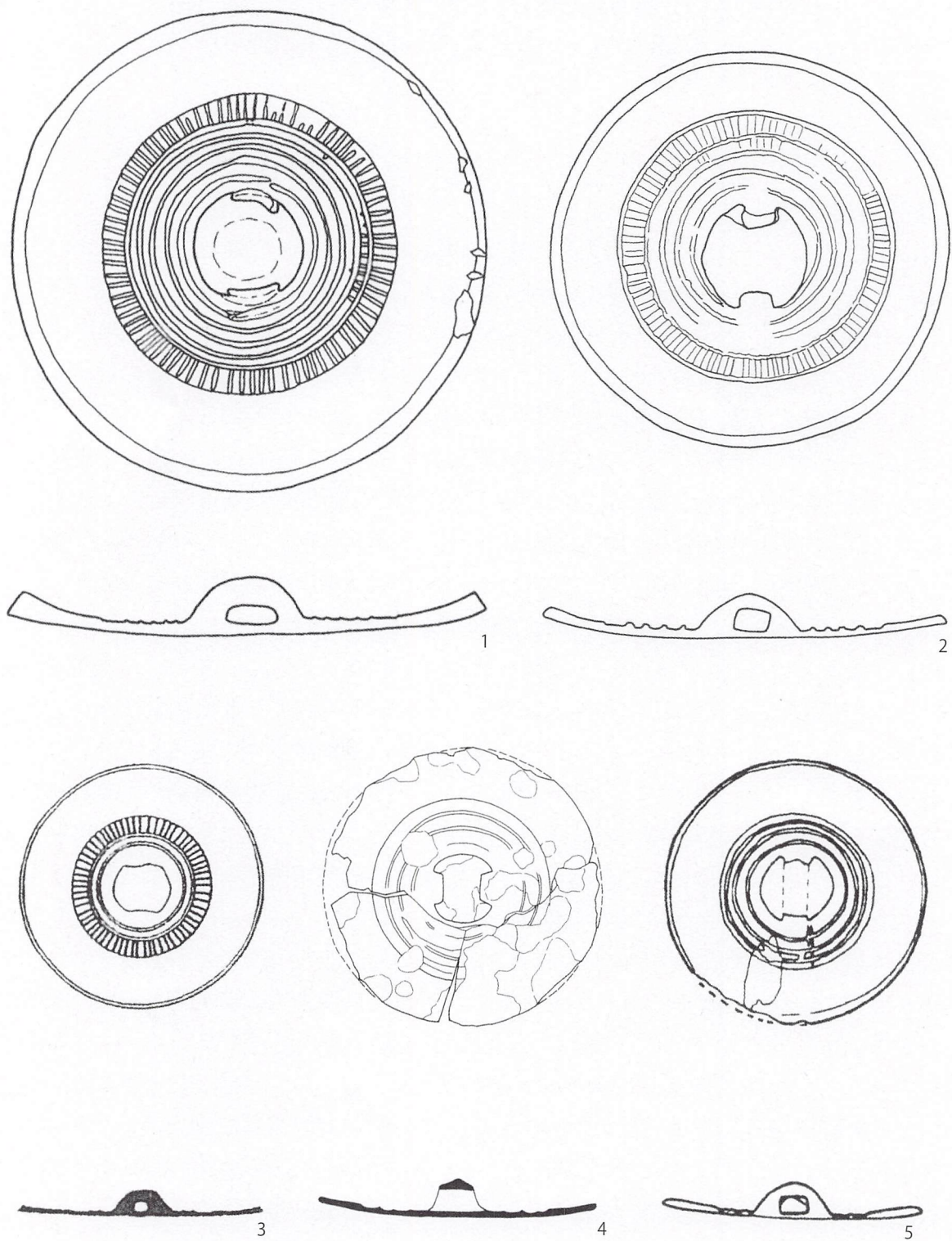


図1 重圈文鏡の分類 (S=1/1)

重圈文鏡A群 (1神奈川 永塚下り畑遺跡住居跡K6, 2石川 西念・南新保遺跡)

重圈文鏡B群 (3 兵庫 藤江別所遺跡, 4千葉 多古台遺跡群No4地点1号墳, 5鳥取 長瀬高浜遺跡)

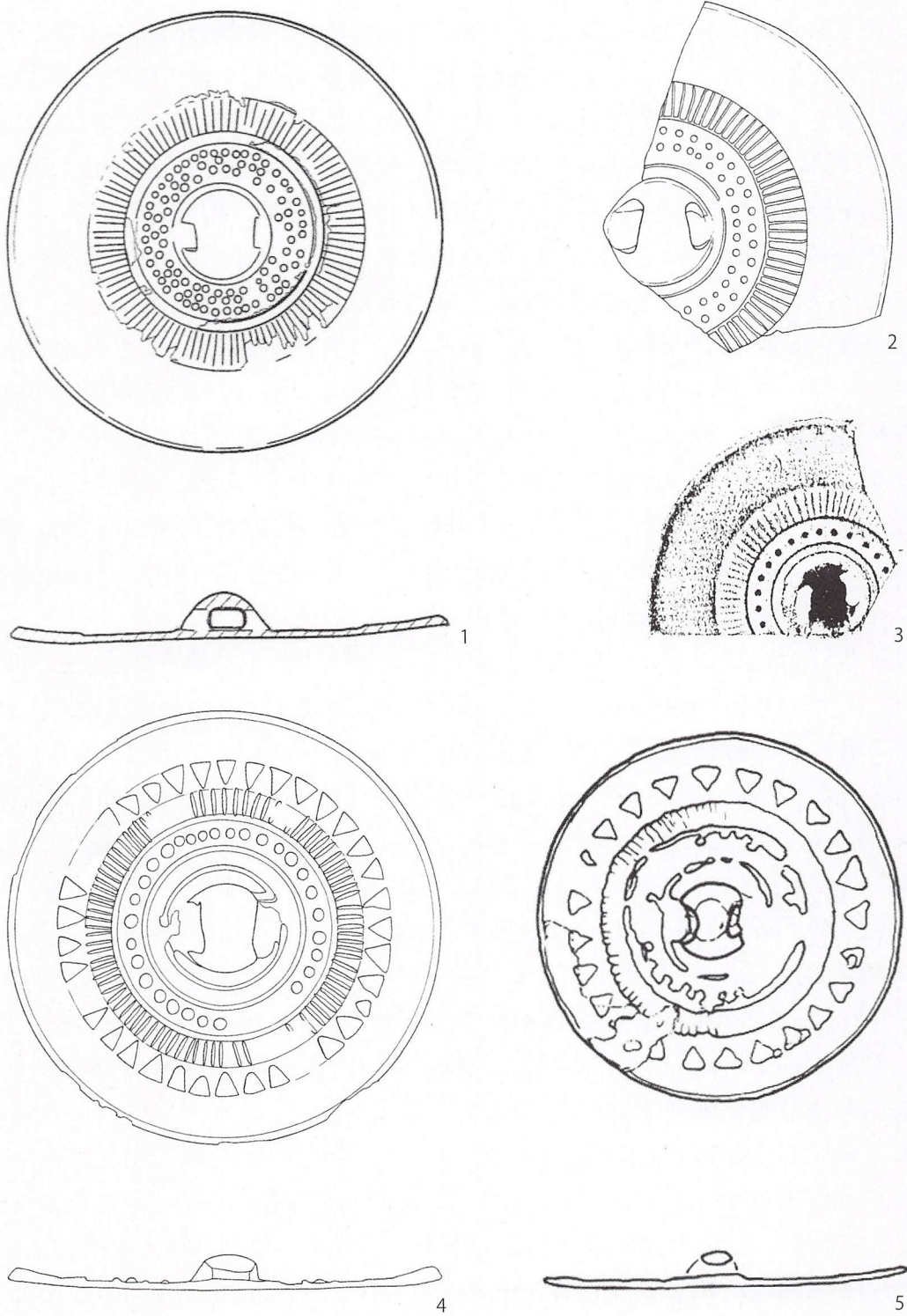


図2 珠文鏡の分類 (S=1/1)

珠文鏡A群 (1鳥取 六部山21号墳, 2千葉 草刈遺跡, 3 滋賀 木曾遺跡)

珠文鏡B群 (4千葉 草刈遺跡, 5神奈川 勝坂有鹿谷祭祀遺跡)

2. 研究史と問題の所在

2.1 重圏文鏡と珠文鏡に関する研究史

重圏文鏡と珠文鏡は、文様を持たない素文鏡と合わせて、倭製鏡のなかで最も小さな鏡群として捉えられてきた。このような小型の鏡は、大きな鏡が時を経て簡略化されたものであり、古墳時代でも新しい時期に位置づけられてきた(小林行1965;樋口1979など)。しかし、出土遺構の時期の検討により、従来の変遷観よりも古い時期から面径の小さな鏡が出現している可能性が指摘されるようになった(森1970;小林三1979;東中川1975など)。そのようななか、1979年に小林三郎氏によって重圏文鏡と珠文鏡に関する論文が発表された。対象資料が限定的ではあったが、この2つの鏡群が他の倭製鏡より早く出現すること、他の倭製鏡とは系統が異なる可能性があること、墳墓以外から出土する事例が多いことが指摘されている(小林三1979)。1990年代になると資料の集成が進み、小林氏の指摘が資料の実態を踏まえてより具体的に明らかとなってきた。特に林原利明氏や藤岡孝司氏による体系的な集成と分析により、重圏文鏡や珠文鏡が弥生時代終末期から古墳時代前期に出土例が集中すること、列島全域から出土することが明らかとなった(林原1990;藤岡1991;中山・林原1994など)。近年では資料の増加や倭製鏡の研究の進展を受けて、分類や編年の検討、製作技術への言及も進んでいる(林2005;岩本2012,2014;脇山2013a,2015)。

資料の整理が進む中で、生産体制に関する議論も展開しており、いくつかの異なる見解が示されている。ひとつは、重圏文鏡や珠文鏡も大型の倭製鏡と同様、近畿中央政権によって生産と流通が管理されていたとする見解である(藤岡1991;今井1991;南2011;脇山2013a,2015)。特に今井堯氏は素文鏡・重圏文鏡・珠文鏡を前期倭製鏡の序列体系の最も下位の鏡群として近畿中央政権によって各地に配られたものであると位置づけている(今井1991)。一方で、林原氏は重圏文鏡が近畿以東から多く出土することから「東日本的な鏡式」と捉える(林原1993)。さらに、重圏文鏡の製作地を関東から北陸に求める考えも出されている(楠元1993)。また、製作技術の検討から、素文鏡・重圏文鏡・珠文鏡は限定された生産体制ではなく、各地域で分散的に生産されたとする見解もあり(林2005)、生産体制については見解が分かれる現状にある。

また、重圏文鏡と珠文鏡の出現時期は、弥生時代小形仿製鏡の生産が終わりを迎え、古墳時代前期の倭製鏡が生産を開始する間にあたとされ、日本列島における銅鏡生産の変遷を考えるうえでも重要な鏡群として捉えられてきた(森下2007,2010など)。このなかで、重圏文鏡や珠文鏡の祖型・系譜を何に求めるのかが課題となっている。ひとつは、十字文鏡などの非北部九州産の弥生時代小形仿製鏡に後続する鏡群と捉える見解である(高倉1985,1995,1999;森岡1989;林原1990;藤岡1991;森下2002,2007,2010;田尻2005,2012;脇山2013aなど)。そして、前期倭製鏡の序列体系における下位の鏡群として理解する見解では、中・大型を省略・小型化したものと考えられている(今井1991)。また、銅鏡以外の器物に系譜を求める見解もあり、脇山佳奈氏は出土状況の類似性から重圏文鏡の系譜を銅鐸破片に求めている(脇山2013b)。このように、重圏文鏡・珠文鏡の系譜については複数の見解が示されている。一方で、文様の単純さから、中国鏡に直接的な系譜は求められないとする点は共通している(小林1979;今井1991;林2005;脇山2013,2015など)

2.2 問題の所在

ここまで見てきたように、重圏文鏡と珠文鏡は資料の整理が進む一方で、生産体制や系譜に関する議論が続いている。重圏文鏡と珠文鏡は、弥生時代終末期から古墳時代初頭に出現することから、日本列島における銅鏡生産の変遷や、弥生時代から古墳時代への移行期の社会をどのように理解するかという問題を考えるうえで重要な資料でもあり、問題の解決が望まれる。

そこで本稿では重圏文鏡と珠文鏡の生産体制や系譜を考えるために、分類・製作技術・時期について再検討を行う。そのうえで、古墳時代の日本列島における銅鏡生産の始まりやその背景となる社会の様相について、小型鏡の系譜と変遷という観点から若干の考察を行いたい。

3. 資料と方法

重圏文鏡は主文様が円圏によって構成される鏡群と定義する。このなかには、単純な圏線だけでなく、圏線の上に珠文を連ねる「連珠文」をもつ資料も含む。珠文鏡は主文様が珠文によって構成される鏡群と定義する。珠文鏡は古墳時代を通じて存在するが、本論文では上記の目的意識から、古墳時代前期の珠文鏡を対象とする⁽¹⁾。

問題解決のために、(1) 分類・製作技術・時期の検討と(2) 祖型と系譜の解明という、大きく2つの分析を行う。(1)では先行研究の成果を踏まえ、今一度資料の状況を整理する。そのうえで、見解が分かれている重圏文鏡と珠文鏡の祖型や系譜を追求していきたい。

また、前期倭製鏡の分類や系列名は先行研究に基づいている(森下1991; 林2000; 下垣2003a,2003b; 辻田2007など)。

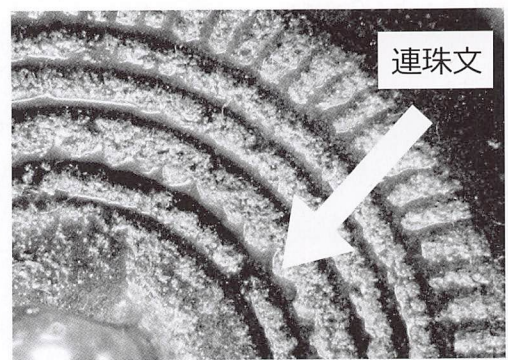


図3 連珠文

4. 分類・製作技術・時期

4.1 分類の再検討

(1) 重圏文鏡の分類(図1)

重圏文鏡の分類については、まず林原氏によって円圏の圏数と外区の櫛歯文帯に注目した分類案が提示された(林原1990)。その後、藤岡氏によって円圏の数に傾向はないことが指摘され、内区文様と外区文様の組み合わせから5型式8類の分類案が提示される(藤岡1991)。以降、林原氏も藤岡氏の案を採用するようになった(林原2002,2008)。脇山氏は、藤岡氏の案を参考に、内区外周、珠文状結線文(連珠文)、段部分の有無に着目した分類案を提示し、7つの類を設定している(脇山2015)。これらの研究では、特に文様に基づいて重圏文鏡を細別している。しかし、重圏文鏡のデザインは単純なものであり、類似や差異といった関係性を議論するのが難しい。そこで、まず形態的な属性として面径と鈕径について検討を行い、そのうえで従来問題視されてきたデザインとの関係を見ていくこととする。

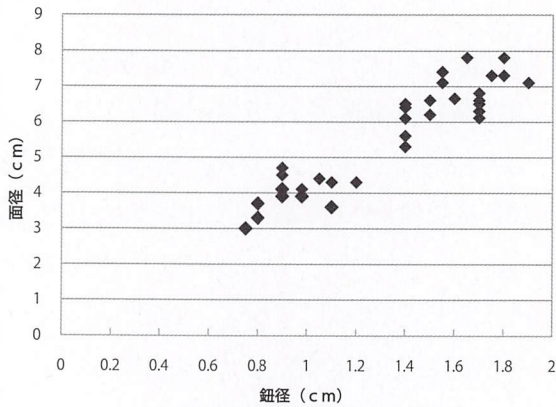


図4 面径 × 鈕径 (重圏文鏡)

	文様構成			
	I a1	I a2	I b	II
グループL	32			
グループS		8	7	5

図5 形態 × 文様構成 (重圏文鏡)

	圏線の数				
	0本	1本	2本	3本	4本
グループL			4	12	12
グループS	2	11	8	3	

図6 形態 × 圏線の数 (重圏文鏡)

	連珠文	
	あり	なし
グループL	8	13
グループS		14

図7 形態 × 連珠文 (重圏文鏡)

重圏文鏡の形態について、縦軸を面径、横軸を鈕径とした散布図を示した(図4)。すると、面径5.3～7.8cm・鈕径1.4～1.9cmの大型なグループと、面径3.0～4.7cm・鈕径0.75～1.2cmの小さなグループの二つに分けることができる。以下、前者をグループL、後者をグループSとする。

重圏文鏡のデザインについて、先行研究では文様構成・圏線の数・連珠文が取り上げられてきた。まず、文様構成は外区をもつIと外区をもたないIIに大きく分けられ、Iはさらに櫛歯文をもつI aともたないI bに分けられる。さらに、櫛歯文をもつI aのなかにも、櫛歯文帯が内区文様帯よりも狭いものと櫛歯文帯が内区文様帯よりも広いものがあり、これらについても文様のレイアウトの違いであると考え、I a1とI a2として細分する。

形態と文様構成の関係では、グループLに帰属する資料はすべて文様構成I a1となる。一方、グループSのなかには文様構成がI a2・I b・IIとなる資料が含まれる(図5)。圏線の数については、グループLが3本や4本が多いのに対し、グループSは2本1本が多い傾向を示す(図6)。最後に、形態と連珠文の相関関係をみると、連珠文をもつものはグループLに限られている(図7)。

このような結果から、重圏文鏡を大きく二つに分類した(図1)。

- ・ A群(39面)：グループLで、文様構成はI a1、圏線は2本以上
連珠文をもつこともある
- ・ B群(27面)：グループSで、文様構成はI a2・I b・II、圏線は3本以下
連珠文はもたない

(2) 珠文鏡の分類(図2)

珠文鏡は、重圏文鏡と異なり、古墳時代を通じて存在する。そこで古墳時代を通じた体系的な分類と編年が試みられ、特に珠文の配置と外区文様が有効な属性として取り上げられてきた(小林1979;中山・林原1994;森下1991;岩本2012,2014;脇山2013aなど)。特に、森下氏によって、珠文が一行・二行に配列され、外区文様が素文か鋸歯文のもの(森下1・2・3式;岩本「列状系」)が古墳時代前期に、二行・三行の珠文が乱雑に埋められ鋸波鋸文や櫛波文などの外区をもつもの(森下4a・4b式;岩本「充填系」)が中期以降にみられることが示され(森下1991)、以降の研究でも大枠が継承されている(岩本2012・2014;脇山2013a)。また、今回分析の対象とする古墳時代前期の珠文鏡については、外区が無文のものと鋸歯文のものが存在し、無文のものが先に出現することが指摘されている(森下1991,脇山2013a)。拙稿(中井2017)でも少し触れたように、珠文鏡の外区文様を基準とした分類案は有効であると考えている。しかし、珠文鏡に関してもデザインが単純なため、形態的な属性との関係を見ておきたい。

珠文鏡の面径と鈕径の相関図を示した。すると、外区が無文の珠文鏡が、鋸歯文の珠文鏡に比べて面径に対して大型の鈕を持つ傾向にあることがわかる(図8)。

また、デザイン的な属性として珠文の配列に注目すると、外区が無文のものには、珠文を一行に配列する資料が多く、二行以上の配列も一定数認められる。一方、外区が鋸歯文のものは、基本的に一行である(図9)。さらに、両鏡群に共通する内区外周の櫛歯文帯の幅を検討したところ、外区が無文のものは鋸歯文をもつものに比べて幅広の櫛歯文帯をもつ傾向にあることが分かった(図10)。

以上から、外区が無文の珠文鏡と鋸歯文の珠文鏡は形態・デザインにおいて異なる傾向を示すことが明らかとなった。したがって、前期の珠文鏡は先行研究にのっとり、外区文様を基準に以下のように分類できる(図2)。

- ・ A群(41面)：外区が無文，珠文は一行から三行，鈕径が大きい，櫛歯文帯が広い
- ・ B群(27面)：外区が鋸歯文，珠文は大半が一行，鈕径が小さい，櫛歯文帯が狭い

4.2 製作技術

以上、分類の再検討から、重圏文鏡と珠文鏡をそれぞれA群とB群の計4つの鏡群に分類した。ここからは、各鏡群の技術的特徴について、(1)鋳型・研磨・凸面鏡(2)銅質・色合い(3)鈕孔形態を検討していく。

(1) 鋳型・研磨・凸面(図11)

土製鋳型・丁寧な研磨・凸面鏡という3つの項目は古墳時代倭製鏡に通有の特徴である。重圏文鏡や珠文鏡の鋳型はこれまで見つかっていないが、文様の掘り込みの深さや櫛歯文の細さなどから、4つの鏡群ともに土製鋳型を用いたと考えられる(森下2007,2010)。また、4つの鏡群すべてにおいて、鏡面と鏡背の凸部分で丁寧な研磨が施されている。さらに、4つの鏡群ともに凸面鏡が一般的である。

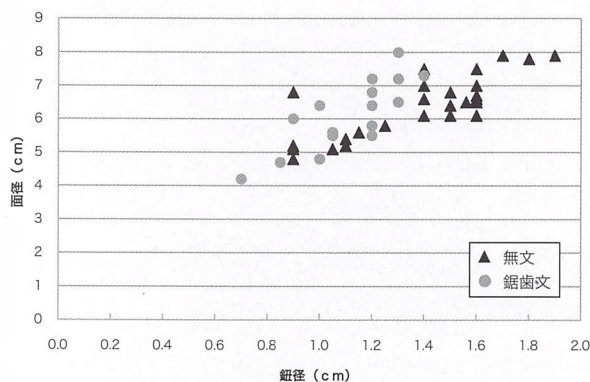


図8 面径 × 鈕径 (珠文鏡)

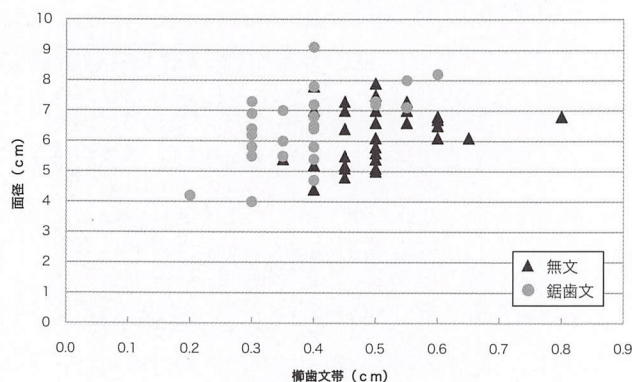


図10 面径 × 櫛歯文帯 (珠文鏡)

	珠文の配列			
	一列	二列	二列	三列
無文	23	1	12	3
鋸歯文	23	2	6	3

図9 外区文様 × 珠文 (珠文鏡)

(2)銅質・色合い

青銅製品の銅質や色合いは、原材料の配合比や合金技術などに関係する。しかし、考古資料としての青銅製品は錆や風化によって、製作された当初の色合を保持しているとは限らない。そのため本来は理化学的な分析が必要であるが、参考として筆者の肉眼観察によって得られた見解を示したい。重圏文鏡と珠文鏡には、銅質や铸上がりが良好で黒鉛色や銀白色を呈する資料と、銅質や铸上がりが良好でなく濁った黄緑色を呈する資料がある。重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群は観察した大半が良好な銅質で銀白色や黒鉛色を呈していた。一方で、珠文鏡B群は銀白色で铸上がりが良好な資料と、黄緑色で铸上がりが不良である資料の両者が併存している。このような観察所見は、珠文鏡B群の原材料の配合比や合金技術が、他の3つの鏡群とは異なる可能性を示唆している。

(3)鈕孔形態(図12)

鈕孔形態は、鈕に設置する中子の形態を反映している。鈕孔に着目した研究として、福永氏による三角縁神獸鏡の検討や秦氏による中子接地面の検討があげられる(福永1991; 秦1994)。倭製鏡の鈕孔の特徴として、鈕孔の底辺が鏡背面と接することが指摘されていた(秦1994)。また、前期倭製鏡の鈕孔形態には円形・半円形と方形が併存することが指摘されている。さらに、前期倭製鏡出現期の前期前半においては円形・半円形鈕孔が主流であり、前期後半にはいると円形・半円形と方形鈕孔が併存するようになるという時期的な変遷も明らかとなってきた(福永1991; 林2002)。

重圏文鏡と珠文鏡の鈕孔はすべて底辺が鏡背面と一致しており、古墳時代倭製鏡と同様の特徴がみられる。また、鈕孔形態を検討したところ、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群は方形鈕孔が大半を占めていることが明らかとなった。一方、珠文鏡B群では円形と方

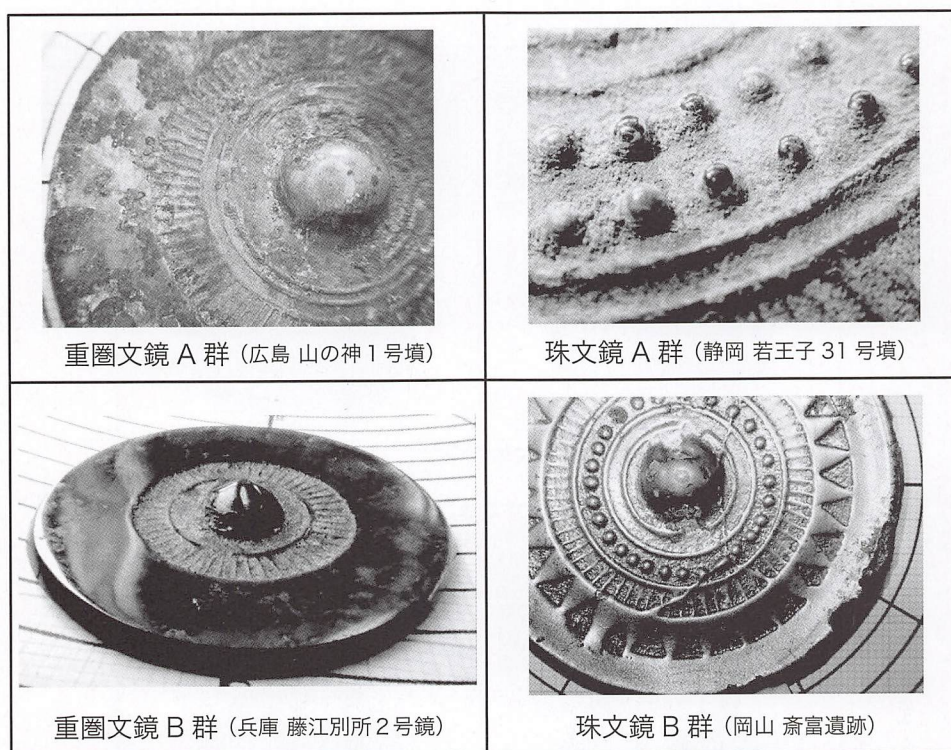


図 11 重圏文鏡・珠文鏡の製作技術

形の両者が併存しており、他の3つの鏡群とは異なる様相を示している。

4.3 製作時期(図13)

出土遺構の時期を参考に、上限を決めうる資料を図13の右端に示した。また、資料の出土遺構の時期幅より、各鏡群の存続時期を図13の通りに考えた。重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群が古墳時代初頭から前期前半に存在するのに対し、珠文鏡B群のみが古墳時代前期後半から出現している。製作技術の結果と同様に、珠文鏡B群が他の3つの鏡群とは異なることが明らかとなった。

4.4 小結(図14)

以上、重圏文鏡と珠文鏡の検討を進めてきた。デザインと形態の検討から、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群・珠文鏡B群の4つの鏡群に分類した。この分類単位にもとづき製作技術や製作時期を検討したところ、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群は良好な銅質をもつ資料が多い点、方形鈕孔が大半を占める点、そして弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて出現する点において共通することが明らかになった。一方で、珠文鏡B群は、各項目で他の3つの鏡群とは異なる様相を示している。そこで、以下では重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群と珠文鏡B群を分けて、その祖型や系譜について分析を進めていく。

	土製鑄型 研磨・凸面鏡	銅質 鑄上がり	鈕孔形態	出現時期
重圏文鏡A群	○	良好	方形	古墳初頭
重圏文鏡B群	○	良好	方形	古墳初頭 ～前期前半
珠文鏡A群	○	良好	方形	古墳初頭
珠文鏡B群	○	良好／不良	円形・半円形 方形	古墳前期後半

図14 分析まとめ

珠文+櫛歯文+鋸歯文」という文様構成は前期後半の小型の内行花文鏡系（下垣分類の内行花文鏡系B式）の一部に共通しており，珠文鏡B群は技術・形態・デザインにおいて，同時期の他の倭製鏡と共通する特徴をもっていると考えられる。（図15・図16）

	銅質・鑄上がり	鈕孔形態
珠文鏡B群	良好／不良	円形・半円形 方形
前期倭製鏡（後半）	良好／不良	円形・半円形 方形

図15 珠文鏡B群と前期倭製鏡（後半）

5.2 重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群

重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群は検討した各項目で共通性が高い。一方で，重圏文鏡A群には他と異なる特徴がある。重圏文鏡A群に分類される石川県田中A遺跡出土鏡と西念・南新保遺跡出土鏡は鈕が中心からずれ，鈕と圏線が重複することが指摘されてきた（橋本・高瀬編1971；鈴木・能城ほか編1996；林2005）。さらに，徳島県宮谷古墳出土鏡も，一番内側の圏線と鈕が重複していることを確認した。林正憲氏は，このような圏線と鈕の切り合い関係は，文様構成面の設定と円圏の施文の後に鈕を設定したためであると指摘した。通例の銅鏡では挽型によって文様構成と鈕が同時に設定される。つまり，重圏文鏡A群は他の銅鏡とは異なる施文工程によって作られていた可能性が考えられるのである（林2005）。このような特徴は重圏文鏡B群・珠文鏡A群では観察できない。さらに，重圏文鏡A群は鏡体が厚いことが指摘されてきた（脇山2015）。重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群の鏡体を比較してみると，やはり重圏文鏡A群が他の2つの鏡群に比べて鏡体が分厚いことが確認できた。このように，重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群は技術や時期において共通

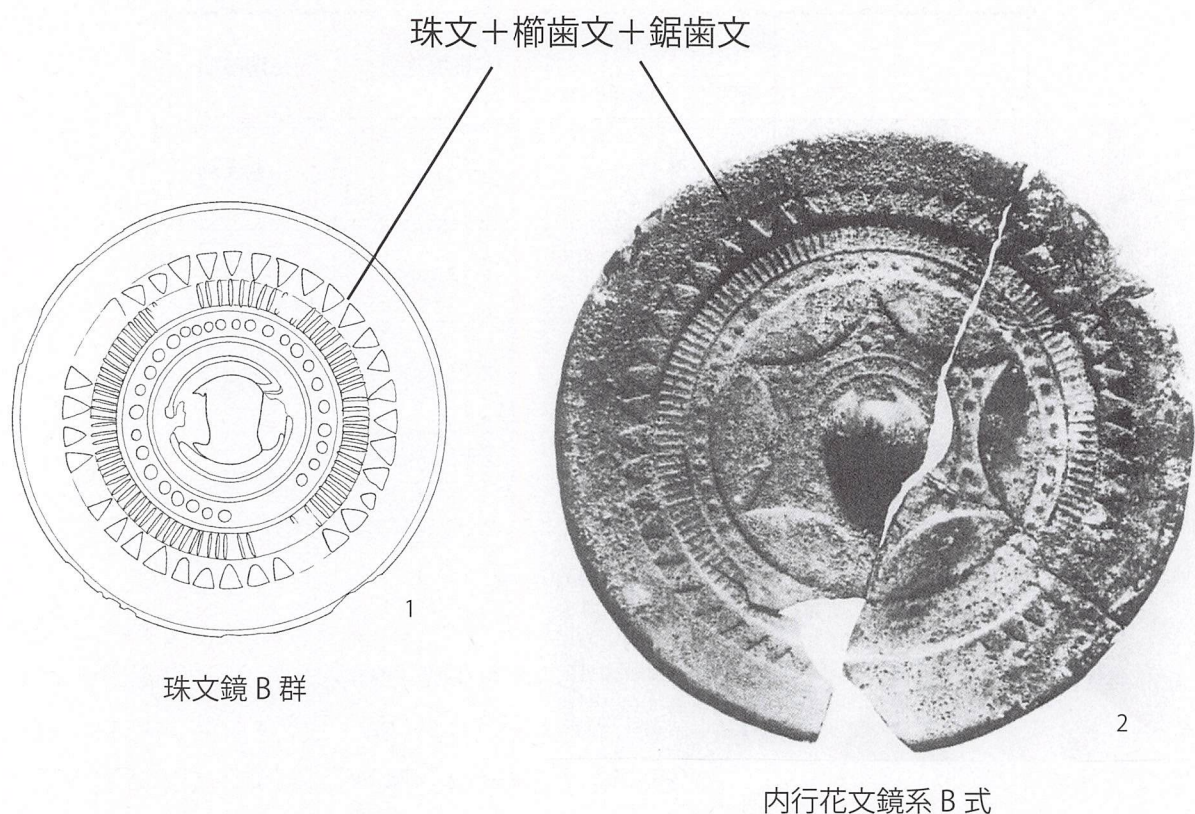


図16 珠文鏡B群の系譜(縮尺任意)
1 千葉 草刈遺跡 2 香川 石清尾山古墳群

性が高いが、重圏文鏡A群は残りの2鏡群とやや異なる様相を示すことを指摘しておきたい。

以上の点を踏まえ、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群と、弥生時代から古墳時代前期に列島で生産された銅鏡との比較を行った(図17)。

(1) 弥生小形仿製鏡との関係

先行研究において、重圏文鏡・珠文鏡と弥生小形仿製鏡との関係が問題となってきた。しかし、重圏文鏡や珠文鏡は古墳時代倭製鏡に通有の土製鋳型・丁寧な研磨・凸面鏡といった特徴を持つことから、製作技術について弥生小形仿製鏡と大きく異なることも指摘されていた。また、今回の分析結果により重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群の大半が方形鈕孔をもつことが明らかになった。弥生小形仿製鏡では方形鈕孔は認められないことから、両者の技術的な差異が一層強調されたと言えよう。このことから、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群の技術的な系譜を弥生小形仿製鏡に求めることは難しいと考える。

先行研究では、大阪府鷹塚山遺跡出土鏡は弥生小形仿製鏡に多く見られる斜行櫛歯文帯を持っており、重圏文鏡と弥生小形仿製鏡をつなぐ資料として注目されてきた。しかし、鷹塚山鏡の鈕孔は大形の円形をしており他の重圏文鏡とは様相が異なる。つまり、鷹塚山鏡は他の重圏文鏡よりも、弥生小形仿製鏡の方が強い共通性を示しており、この1面から他の重圏文鏡と弥生小形仿製鏡との間の繋がりを見出すことは難しいと考える。

	土製鑄型 研磨・凸面鏡	銅質・鑄上がり	鈕孔形態
弥生小形仿製鏡	×	不良	円形・半円形
重圏文鏡A群・B群 珠文鏡A群	○	良好	方形
前期倭製鏡（前半）	○	良好	円形・半円形

図17 弥生小形仿製鏡・前期倭製鏡との比較

(2) 弥生時代終末期～古墳時代初頭の獣形鏡との関係(図18)

ここで、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群が出現する弥生時代終末期～古墳時代初頭にみられる獣形鏡に注目したい。この時期には少数ではあるものの、京都府芝ヶ原12号墳や奈良県見田大沢4号墳出土鏡などの中形の獣形鏡が日本列島で製作されていた可能性が指摘されてきた(楠元1993など)⁽²⁾。個体差が大きいためその評価については課題が残されているが、そのなかで見田大沢鏡が方形鈕孔であることに注目したい。

そこで、見田大沢4号墳出土鏡と関連鏡群について詳しく見ていくこととする。具体的な資料としては、兵庫県養久山1号墳や大阪府矢作遺跡出土鏡がある⁽³⁾。これらはいずれも獣像を主要図像とするが、その獣像に着目すると、見田大沢鏡や養久山鏡よりも矢作鏡は簡略化した表現になっている。さらに、栃木県茂原愛宕塚古墳出土鏡では、獣像とは判別できない4つのS字状文が主要図像となっており、矢作鏡の獣像がさらに簡略化したものと考えることができる。茂原愛宕塚鏡は方形鈕孔をもつことから、同一の系列として捉えることができる。また、重圏文鏡A群のなかには兵庫県井の端7号墳出土鏡のように圏線の幅が広く施文される資料がある。このような文様構成は、茂原愛宕塚鏡のS字状文が欠落した結果と考えられる。つまり、重圏文鏡A群は見田大沢鏡をはじめとする獣形鏡の獣像の簡略化と欠落の結果、成立したと考えられる。獣像や方形鈕孔に加え、見田大沢鏡や養久山鏡が内区外周に多重の圏線をもつこと、矢作鏡には重圏文鏡A群の一部と共通する連珠文がみられること、面径に対して大型な鈕をもつことなどもこれらの鏡群の関係性の強さを示している。

では、重圏文鏡A群の祖型となる見田大沢鏡の系譜はどこにたどれるのだろうか。先行研究では、見田大沢鏡のモデルとして中国鏡である上方作系浮彫式獣帯鏡が考えられてきた(赤塚1998；下垣2003aなど)。つまり、重圏文鏡A群は、中国鏡をモデルにして成立した系列の変遷のなかで成立したと考えることができる(図18)。

また、重圏文鏡A群は重圏文鏡B群・珠文鏡A群に比べて鏡体が厚いことを指摘したが、見田大沢鏡をはじめとする獣形鏡も鏡体が2mm以上と厚い。つまり、獣形鏡の変遷の結果、まず重圏文鏡A群が成立し、やや遅れて珠文鏡A群と重圏文鏡B群が出現した可能性を想定しておきたい。

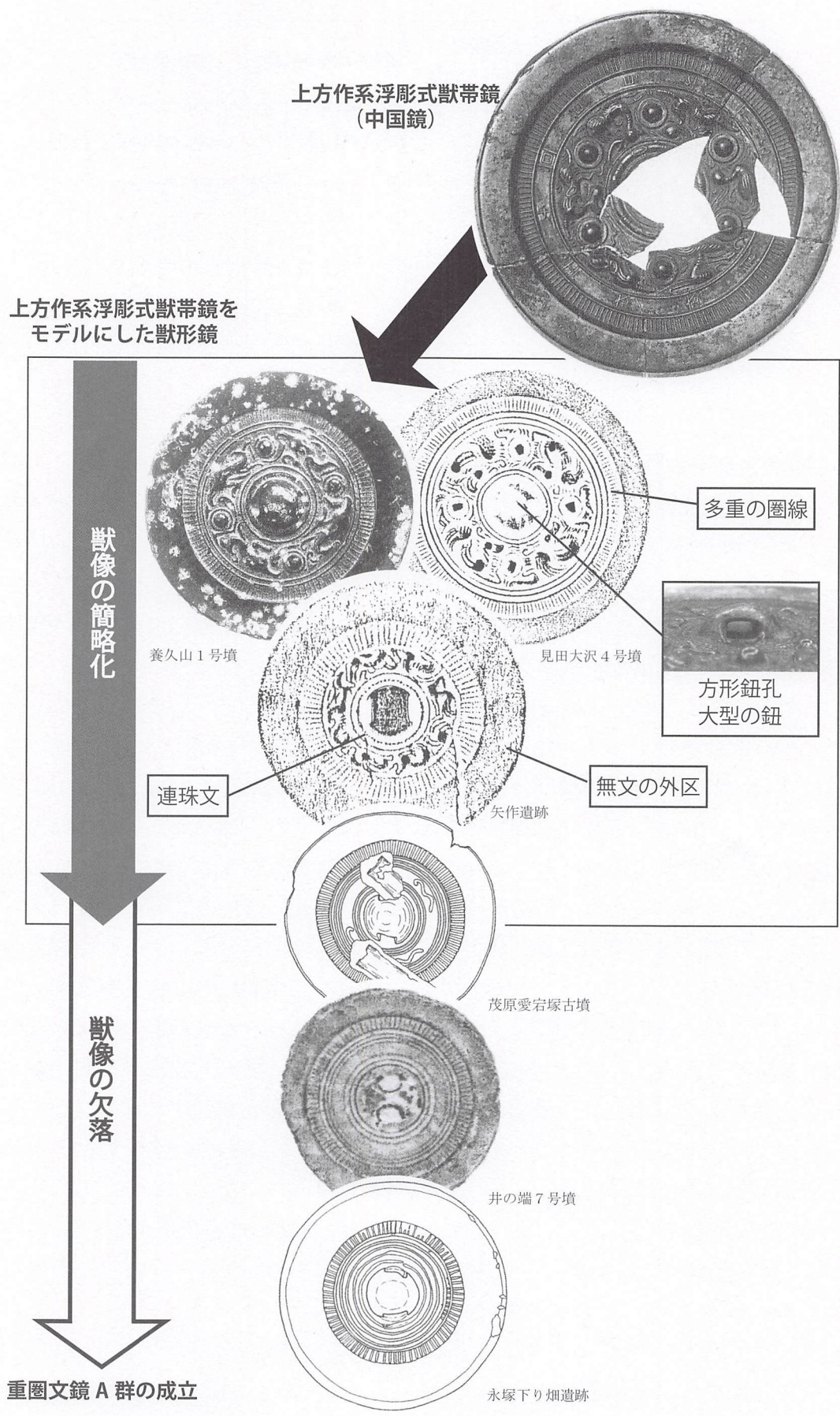


図18 重圏文鏡の成立過程

このように、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群の系譜は同時期の獣形鏡、そして中国鏡に辿ることができた。獣形鏡の生産面数が非常に少ないことから、重圏文鏡・珠文鏡への変遷は比較的短期間に生じたと考えられる。一方で、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群は各30～40面ほど存在しており、この時期の日本列島における銅鏡生産の主流は、面径10cm未満の小型鏡であったのである。また、中国鏡がモデルであったことから製作技術のみならず、モデルやデザインにおいても弥生小形仿製鏡に直接の系譜を見出すことは難しいと言える。

(4) 前期倭製鏡との関係

では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の間に出現する重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群と、古墳時代前期前葉に出現する前期倭製鏡の中心的な系列との関係はどのように理解できるのか(図17)。両者は鑄型・研磨・凸面にみられる技術的特徴は共有する一方で、鈕孔形態に関しては異なる様相をみせる。重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群は方形鈕孔が大半を占めるのに対し、前期前半の他の倭製鏡は円形・半円形鈕孔が基本である。しかしながら、前期前葉に位置づけられる倭製鏡にもわずかながら方形鈕孔をもつものがあることに注目したい。福井県小羽山12号墳出土鏡や岡山県一宮天神山古墳出土鏡といった捩文鏡系の一部である。捩文鏡系は大型の鼉龍鏡系の単位文様の一部を抽出して生成された小型鏡で、断面形態においても鼉龍鏡系との共通性がみられる。しかし、この2面の鈕孔は明瞭な方形であり、ここで問題となってくるのが、大半が方形鈕孔をもつ重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群との関係である。この問題を考えるうえで、一宮天神山鏡に注目したい(図19)。この鏡の外区には複合鋸歯文という特徴的な文様が描かれている。複合鋸歯文は古手の鼉龍鏡系や捩文鏡系にしばしばみられる文様である。珠文鏡にも複合鋸歯文をもつ資料がある(脇山2013a)。広島県宇那木山2号墳から出土した珠文鏡である。外区文様を基準とした筆者の分類案ではどう位置づけるのか困る資料であるが、方形鈕孔をもつこと、銀白色で非常に良好な銅質であること、宇那木山2号墳が古墳時代初頭であることから、複合鋸歯文以外のデザイン・製作技術・時期は他の珠文鏡A群と共通すると言える。つまり、複合鋸歯文と方形鈕孔を共有する一宮天神山鏡と宇那木山鏡から、前期倭製鏡の捩文鏡系と珠文鏡A群の間の繋がりを見出すことができる。したがって、捩文鏡の成立には大型鏡である鼉龍鏡系だけでなく、すでに列島産の小型鏡として存在していた珠文鏡A群の影響も想定することができる。

ここまでの議論を統合すると、弥生時代終末期から古墳時代初頭に上方作系浮彫式獣帯鏡をモデルに中形の獣形鏡が生み出され、それはすぐに小型の重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群へと変遷を遂げた。そして、前期倭製鏡の中心的な系列へと展開していく変遷過程を描くことができる(図20)。

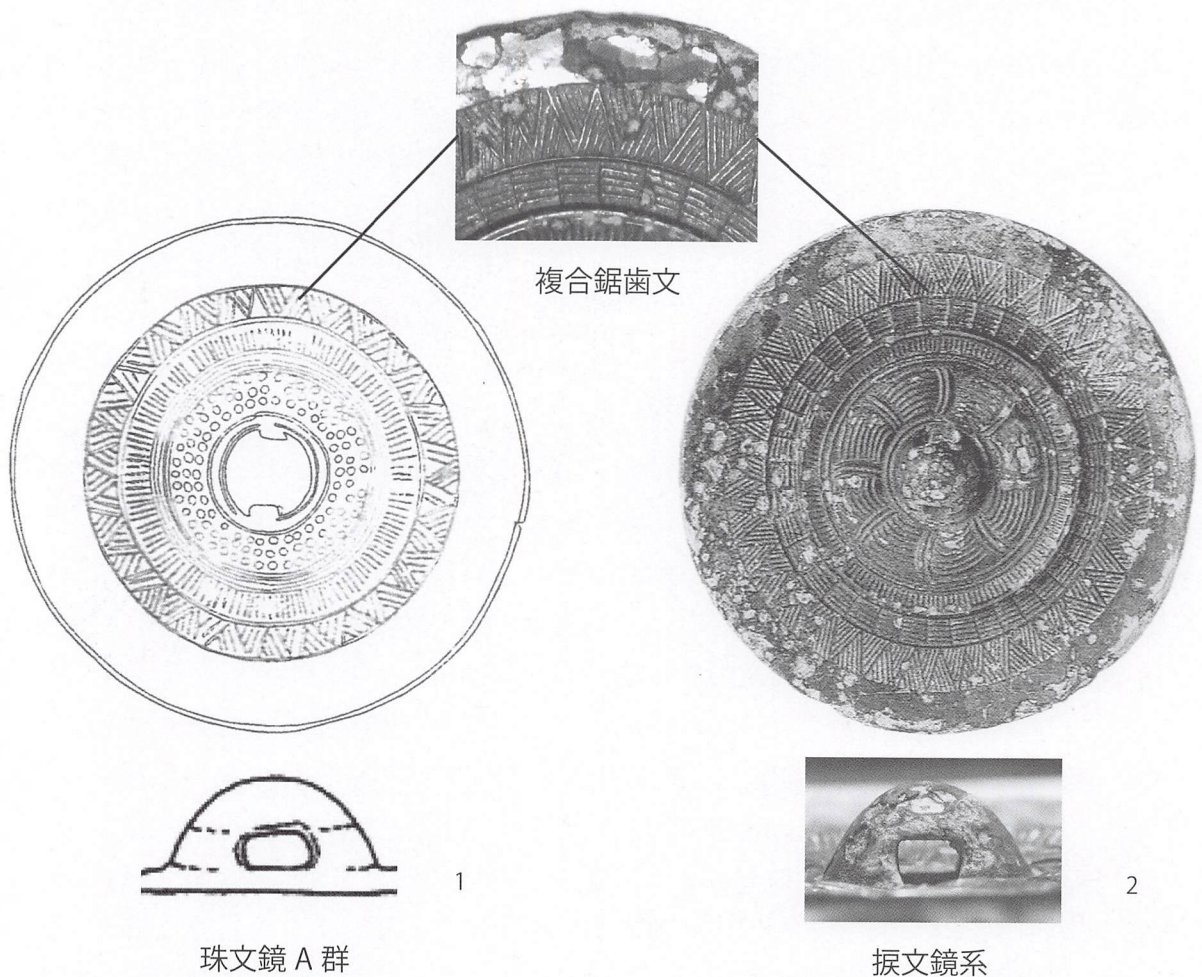


図19 珠文鏡A群と前期倭製鏡（前半）（縮尺任意）

1広島 宇那木山2号墳, 2岡山 一宮天神山古墳

6. 古墳時代前期における小型鏡の系譜と変遷 —重圏文鏡・珠文鏡を対象として—

ここまで、古墳時代前期における最も小さな鏡群として、重圏文鏡と珠文鏡の分析を行ってきた。特に、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群の系譜と変遷を図20のように示したことは、弥生時代終末期から古墳時代前期における日本列島での銅鏡生産の変遷を考えるうえで大きな意義を持つ。これまで、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群のモデルは中国鏡に求めることができないとされていた。しかし、見田大沢鏡などの獣形鏡を介在させることで、これらの鏡群が中国鏡である上方作系浮彫式獣帯鏡をモデルとして成立したことが明らかとなった。さらに、鈕孔形態をはじめとする製作技術が弥生小形仿製鏡とは明確に異なることから、モデルと製作技術の2つの点において、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群は弥生小形仿製鏡には直接的な系譜を求めることはできない。

今回、分布図を提示することはできなかったが、各鏡群は列島広域に分布している。一方で、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群は方形鈕孔という技術的な特徴を共有している。このことから、各地で出土するこれらの鏡は、限定的な生産体制のなかで製作され、各地にもたらされたと考えられる。また、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群にはそれ

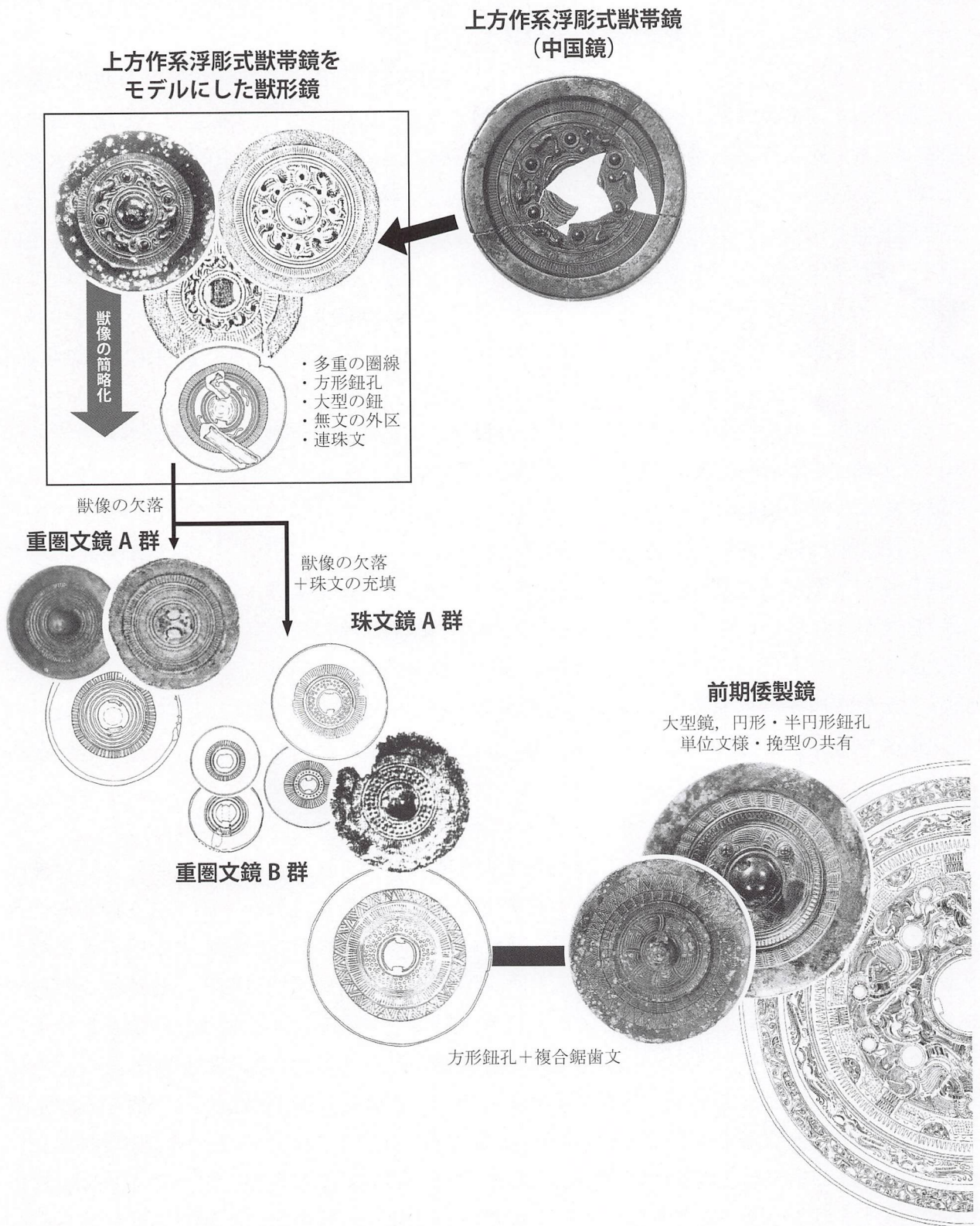


図20 重圈文鏡・珠文鏡の系譜と変遷

ぞれ30～40面が該当し、獸形鏡のような単発的な生産ではなく、一定数が生産されたものと考えられる。つまり、内行花文鏡系・方格規矩四神鏡系・鼉龍鏡系のような前期倭製鏡の中心的な系列の出現以前に、弥生小形仿製鏡とは隔絶的な銅鏡の生産が、比較的安定したものとして開始されていたと考えることができる。

そして、宇那木山鏡を介して、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群と前期倭製鏡の小型鏡である捩文鏡系との関係を見出すことができた。このことと、限定的な生産体制や広域的な分布、鈕孔形態以外の製作技術の共通性を合わせて考えると、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群は、前期倭製鏡と同様に近畿中央政権(あるいはその前身)によって生産・流通が管理されていた可能性がある。つまり、重圏文鏡A群・B群・珠文鏡A群は、古墳時代前期に展開する近畿中央政権による銅鏡の生産・流通のコントロールの発現過程として理解することができるのである。しかし、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群はすべて面径10cm未満の小型鏡であり、大型鏡と小型鏡という面径序列をもった前期倭製鏡の生産・流通システムとは大きく異なることは強調しておきたい。

では、他の3つの鏡群とは異なる様相を示した珠文鏡B群はどのように考えられるだろうか。珠文鏡B群は前期後半に出現し、同時期の他の倭製鏡と同様の特徴をもつ。つまり、珠文鏡B群は前期倭製鏡における面径序列の下位の鏡群として位置づけることができるのである。重圏文鏡と珠文鏡について、前期倭製鏡の面径序列の下位に位置づける見解がこれまでも示されてきたが(今井1991;脇山2013など)、今回の分析により、同じ珠文鏡でも筆者分類のB群がそれに該当することが明らかとなった。前期後半は倭製鏡の生産数が増加する時期であり新たな系列が多数生み出される。特に、捩文鏡系や内行花文鏡系B式といった小型鏡の生産数が激増しており、小型鏡への需要の高まりが伺える。珠文鏡B群はそのなかで、捩文鏡系や内行花文鏡系B式より小型な鏡として生み出されたものと考えることができる。

おわりに

今回面径の小さな鏡として重圏文鏡と珠文鏡を取り上げた。それぞれ2つの分類単位を設定し製作技術や時期を検討することで、重圏文鏡A群・重圏文鏡B群・珠文鏡A群と珠文鏡B群の間に大きな差異が存在し、それが各鏡群の評価の違いにつながるということが明らかとなった。研究史と問題の所在にて、重圏文鏡と珠文鏡の生産体制や系譜に関する見解が複数あげられていることを指摘したが、それはこの2者が混在して捉えられていたためである。

弥生時代終末期から古墳時代前期における日本列島での銅鏡生産の変遷を図20のように描くことができたことにより、重圏文鏡や珠文鏡が古墳時代前期の銅鏡生産の成立過程を考えるうえで重要な資料であることがより具体的に明らかとなった。一方、今回の分析では、分布図の提示や出土状況の検討ができなかった。先行研究により重圏文鏡と珠文鏡は墳墓以外から出土することが指摘されており、前期倭製鏡と異なる特徴として注目されている。今回の成果を踏まえて、このような出土状況がどのように評価されるべきか改めて考える必要がある。この点に関しては別稿を用意しているのでそちらに譲りたい。

《謝辞》

本稿は、平成26年度九州考古学会総会および平成27年度九州史学会の内容をもとに加筆・修正したものである。また、本稿は筆者が九州大学在学中に進めてきた研究内容であり、2015年3月に御逝去されるまで筆者の世話人教員を務めていただいた田中良之先生をはじめ、岩永省三先生、辻田淳一郎先生、小山内康人先生、宮本一夫先生、溝口孝司先生、菅浩伸先生、瀬口典子先生、田尻義了先生、舟橋京子先生、足立達朗先生には多大なる御指導を賜りました。

また、本稿の内容の一部をもとに平成29年6月のさきたま講座で講演を行った。聴講いただいた方々、発表の機会を与えてくださった方々に深く御礼申し上げたい。

さらに、資料調査や写真の掲載につきまして、下記の諸機関に便宜を図っていただきました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

明石市教育委員会・岡山県教育委員会・岡山理科大学考古学研究室・檀原考古学研究所附属博物館・柏市教育委員会・徳島市立考古資料館・広島県府中市教育委員会・藤枝市郷土博物館(五十音順)

《図版出典》

【図1】 1. 齋木秀雄ほか2002『下曾我遺跡永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点』 2. 鈴木ほか1996 3. 稲原昭嘉1996『明石市藤江別所遺跡』 4. 黒沢哲郎1999『多古台遺跡群Ⅰ』 5. 財団法人鳥取県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所1999『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』 【図2】 1. 鳥取県立公文書館県史編さん室2013『古郡家1号墳・六部山3号墳の研究：出土品再整理報告書』 2. 千葉県文化財センター2004『市原市草刈遺跡C区・保存区』 3. 堀真人・重岡卓1999『木曾遺跡Ⅲ』 4. 千葉県文化財センター2004 5. 加藤修ほか2010『勝坂有鹿谷祭祀遺跡資料報告書』 【図3】筆者撮影：宮谷古墳出土鏡(徳島市立考古資料館所蔵) 【図11】筆者撮影：山の神1号墳(広島県府中市教育委員会所蔵)藤江別所遺跡2号鏡(明石市教育委員会所蔵)若王子31号墳(藤枝市郷土博物館所蔵)斎富遺跡(岡山県教育委員会所蔵) 【図12】筆者撮影：重A(戸張一番割遺跡・柏市教育委員会所蔵)重B(藤江別所遺跡1号鏡・明石市教育委員会所蔵)珠A(藤江別所遺跡4号鏡・明石市教育委員会所蔵)珠B(斎富遺跡・岡山県教育委員会所蔵) 【図16】 1. 図2-4と同じ 2. 瀬戸内海歴史民俗資料館編1983『讃岐青銅器図録』 【図18】上方作系浮彫式獸帯鏡(車崎正彦編2002『考古資料大観』5)養久山1号墳(近藤義郎ほか1985『養久山墳墓群』)見田大沢4号墳(鈕孔形態：筆者撮影(檀原考古学研究所附属博物館所蔵)・奈良県立檀原考古学研究所1982『見田・大沢古墳群』)矢作遺跡(米田敏幸1987『矢作遺跡発掘調査概要』)『八尾市文化財調査報告』15)茂原愛宕塚古墳(久保哲三1990『茂原古墳群』)井の端7号墳(島田拓2009『井の端古墳群(調査編)』)永塚下り畑遺跡(図1-1と同じ) 【図19】 1. 脇山2013 2. 筆者撮影：岡山理科大学考古学研究室所蔵

《註》

- (1) 森下氏の1式・2式(森下1991)、脇山氏のA-B類・D-B類(脇山2013)におおよそ相当する。
- (2) これらの鏡群の時期的な位置づけについて、従来の見解よりも下る可能性が指摘されている(下垣2016)。この点については今一度整理する必要がある。
- (3) 芝ヶ原12号墳出土鏡は、見田大沢・養久山鏡などとは文様・断面形態・鈕孔形態など様々な点で異なる様相を示しており、個別の位置づけが必要であると考えている。

《文献》

- 赤塚次郎 1998 「獸形文鏡の研究」『考古学フォーラム』10
今井 堯 1991 「中・四国地方古墳出土素文・重圈文・珠文鏡—小形倭鏡の再検討Ⅰ—」『古代吉備』13
岩本 崇 2012 「中村1号墳出土珠文鏡と出雲地域の銅鏡出土後期古墳」『中村1号墳』
岩本 崇 2014 「銅鏡副葬と山陰の後・終末期古墳」『兵庫県香美町村岡文堂古墳』
楠元哲夫 1993 「古墳時代倭製鏡製作年代試考」『大和宇陀地域における古墳の研究』
車崎正彦 1993 「甕籠鏡考」『翔古論聚』
小林三郎 1979 「古墳時代倭製鏡の一側面—重圈文鏡と珠文鏡—」『駿台史学』46
小林行雄 1965 『古鏡』
下垣仁志 2003a 「古墳時代前期倭製鏡の編年」『古文化談叢』49
下垣仁志 2003b 「古墳時代前期倭製鏡の流通」『古文化談叢』50(上)

- 下垣仁志 2016 『古墳時代銅鏡の研究』科学研究費補助金(若手研究(B))研究成果報告書,平成25年-27年度
- 鈴木三男・能城修一・光谷拓実・肥塚隆保・楠正勝 1996 『西念・南新保遺跡Ⅳ』金沢市文化財紀要
- 高倉洋彰 1985 「弥生時代小形仿製鏡について(承前)」『考古学雑誌』70-3
- 高倉洋彰 1995 「弥生時代小形仿製鏡の儀鏡化について」『居石遺跡』
- 高倉洋彰 1999 「儀鏡の誕生」『考古学ジャーナル』446
- 田尻義了 2005 「近畿における弥生時代小形仿製鏡の生産」『東アジアと日本:交流と変容』九州大学
21世紀COEプログラム(人文科学東アジアと日本:交流と変容)
- 田尻義了 2012 『弥生時代の青銅器生産体制』
- 辻田淳一郎 2007 『鏡と初期ヤマト政権』
- 中井 歩 2017 「前組羽根倉遺跡出土珠文鏡について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』10
- 中山清隆・林原利明 1994 「小型仿製鏡の基礎的集成(1)—珠文鏡の集成—」『地域相研究』21
- 橋本澄夫・高瀬 澄 1971 『金沢市田中A・B遺跡』北陸自動車道路・金沢バイパス関係埋蔵文化財調査概報
- 秦 憲二 1994 「鈕孔製作技法から見た三角縁神獸鏡」『先史学・考古学論究』熊本大学文学部考古学
研究室創設20周年記念論文集
- 林 正憲 2000 「古墳時代前期における倭鏡の製作」『考古学雑誌』85 - 4
- 林 正憲 2002 「古墳時代前期倭鏡における2つの鏡群」『考古学研究』49 - 2
- 林 正憲 2005 「小型倭鏡の系譜と社会的意義」『待兼山考古学論集』
- 林原利明 1990 「弥生時代終末～古墳時代前期の小形仿製鏡について—小形重圏文仿製鏡の様相—」
『東国史論』第5号
- 林原利明 1993 「東日本の初期銅鏡」『考古学ジャーナル』43
- 林原利明 2002 「永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点K 6号住居址出土の銅鏡(重圏文鏡)」『下曾我遺跡永塚下り畑
遺跡第Ⅳ地点』
- 林原利明 2008 「成塚向山1号墳出土の重圏文鏡について」『成塚向山古墳群』
- 東中川忠美 1975 「珠文鏡について」『恵子若山遺跡』
- 樋口隆康 1979 『古鏡』
- 福永伸哉 1991 「三角縁神獸鏡の系譜と性格」『考古学研究』38-1
- 藤岡孝司 1991 「重圏文(仿製)鏡小考—3～4世紀における—小形仿製鏡の様相—」『君津郡市文化財セ
ンター研究紀要』Ⅴ
- 南健太郎 2011 「重圏文鏡の生産・拡散とその意義—南九州における検討から—」『アジア鑄造技術史学
会研究発表概要集』第5号
- 森 浩一 1970 「古墳出土の小型内行花文鏡の再吟味」『日本古文化論攷』
- 森岡秀人 1989 「銅鏡」『季刊考古学』27
- 森下章司 1991 「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』74-6
- 森下章司 2002 「古墳時代倭鏡」『考古資料大観5弥生・古墳時代鏡』
- 森下章司 2007 「銅鏡生産の変容と交流」『考古学研究』54-2
- 森下章司 2010 「古墳出現規における中国鏡の流入と仿製鏡生産の変化」『日本考古学協会2010年度兵庫
大会研究発表資料集』
- 脇山佳奈 2013a 「珠文鏡の研究」『史學研究』279
- 脇山佳奈 2013b 「庄・蔵本遺跡出土銅鐸破片の意義」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要』1
- 脇山佳奈 2015 「重圏文鏡の画期と意義」『広島大学考古学研究室紀要』第7号